

■海保青陵 経世家。代表作「稽古談」ほか多くの著作講義で、商品経済の発達による富国を説く画期的な重商主義論を展開した。

かいほせいりょう

自然真菅道・1755＝

宮津藩の家老角田市左衛門(青溪と号す)の長子として江戸に生まれる。父は徂徠の系統をひく経世家で、この頃宮津藩の藩政改革に専念。

・・・・・・1756＝1歳：父が藩の内紛にまきこまれて辞職し、家督を譲ったので、青陵は家督を継いだ。

宝暦事件・・・・1758＝3歳：父子ともども宮津藩に暇願を出す。

大岡忠光没・1760＝5歳：

加賀千代句集1764＝9歳：徂徠の高弟宇佐見しん水の門に入る。青陵の父青溪もしん水の門にかつて学んでおり、父子ともに、同一の師について学んだという珍しいケース。ここでは秦漢以後の本を読むことは許されず、若き日の青陵は徹底的に古文辞学の訓練をうける。

・・・・・・1770＝15歳：幕府の奥医師桂川甫三のもとにあずげられ、翌年にかけて、ここからしん水の塾に通う。一つ年長の桂川甫周からつねに知的しごきを受ける。

御蔭参流行・1771＝16歳：父青溪、尾張藩に召され、青陵も藩公にお目通りをなす。留書役に召されたけれども辞退。

田沼意次老中1772＝17歳：

大原騒動・・・・1773＝18歳：

雨月物語刊・1776＝21歳：宇佐見しん水が死去。尾張藩への御目見得を返上。舎弟を嫡子として、門人の世話で日本橋檜物町に学寮をつくった。

天明大飢饉始1782＝27歳：宮津藩主青山侯に儒者奉公。奥勤めをなし、主君の長男・次男に書を講じた。

田沼意次失脚1786＝31歳：

この儒者奉公は7年つづけられたが、ある時、青山侯から藩の財政について気づいたことをしるせといわれ、その問題について父と討究。経世の問題について開眼し、

初の横綱・・・・1789＝34歳：\*青山家への儒者奉公をやめ、自由の身となり、江戸をたって京都に向かい、

混浴禁止・・・・1791＝36歳：

ラクスン来日・1792＝37歳：大坂の福島浄裕寺で文法を講じ、父が死去したために急拠江戸に帰り、喪に服した後、越後に向かい、

松平定信引退1793＝38歳：蒲原郡の木戸の大庄屋小林栄のもとに遊び、文法等の講義するなど、

オランダ正月・1794＝39歳：越後、信濃を歴遊、母を失ったので江戸に帰る。喪を終えたのち、ふたたび西遊、北は丹波、南は紀州、西は讃岐、備中まで至り、各地で書を講じた後、

写楽・・・・1795＝40歳：大阪で塾をひらく。

ポート来航・1796＝41歳：京都に塾を移し、5年間滞在。

古事記伝・・・・1798＝43歳：\*大坂での講義をもとにした「文法披雲」を刊行。

伊能測量始・1800＝45歳：

宣長没・・・・1801＝46歳：尾張藩儒老細井平洲が大病にかかったため、江戸に下って、尾張藩の儒老となる。

いざ乃来航・1804＝49歳：3年間尾張藩の儒老をつとめたが、江戸の水土が合わず、しばしば大病にかかったため、尾張藩の儒官を辞し、江戸を後にし、越後に向かう。

青洲麻醉手術1805＝50歳：金沢に移る。「富貴談」成る。

いざ乃報復・1806＝51歳：高岡に移る。立山に登り、下山後、越中各地を歴訪、京都に帰る。

浮世風呂・・・・1809＝54歳：

・・・・・・1810＝55歳：「綱目駁談」執筆。

浮世床・・・・1813＝58歳：\*代表作「稽古談」成る。

黒住教・・・・1814＝59歳：「洪範談」刊行。

杉田玄白没・1817＝62歳：病没した。